

上級日本語学習者による動詞中止形の使用状況
——叙述文における関係的意味の分析を中心に——

How Advanced Learners of Japanese Manage
the Use of Non-Finite Forms of Verbs:
Analysis of Relational Meanings in Predications

宮崎 聡子

MIYAZAKI, Satoko

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第46号 2018年11月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.46 2018

上級日本語学習者による動詞中止形の使用状況 — 叙述文における関係的意味の分析を中心に —

宮崎聡子*

1. はじめに

文中を中止する用言の形には、いわゆる「連用形」と「テ形」のふたつの形式（以下、両者を合わせて「中止形」と呼ぶ）がある。中止形の中心的な機能は文中を中止することであり、前件と後件の間には、次の例文のようにさまざまな関係的意味が成立する。

- (1) a. 兄はジムに {行き／行って}、弟は釣りに行った。（並列）
- b. 兄はジムに {行き／行って}、職場に向かった。（先行事態）
- c. 兄はジムに {行き／行って}、ダイエットに成功した。（因果関係）

日本語教育では、まず初級において活用形のひとつとして「行って」のような「テ形」を学ぶ。例（1）にみるような並列、先行事態、因果関係の用法が、主に話し言葉のテキストの中で紹介される。そして中級になると、書き言葉の文体の特徴のひとつとして「行き」のような「連用形」を学ぶ。学習者にとっては、並列や先行事態、因果関係など複数の関係的意味を担う形式を、文体も考慮して適切に使わなければならないため、習得の難しい文法項目のひとつだといえる。従来、学習者による「テ形」の誤用例研究は数多くなされており、また「テ形」「連用形」の文体の違いによる使い分けに関しても、研究が進められている。しかし、日本語母語話者と学習者の使用状況を量的、内容的に比較・分析したものは、まだ少ないようである。

本稿では、「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（金澤編2014、以下「YNUコーパス」とする）を資料とし、上級日本語学習者の動詞中止形の使用の特徴について、主に叙述文における関係的意味に注目し、日本語母語話者と量的・内容的な比較をしながら考察を行う。関係的意味とは、「先行節（の中止形の語）が後続句節（の述語）の表す事柄に対して、どのような意味を担っているか」（津留崎2003b：151）をいう。なお以下においては、高橋ほか（2005）にならい、「連用形」を「第1中止形」、「テ形」を「第2中止形」と呼ぶこととする。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程，長崎外国語大学特別任用講師

2. 先行研究

日本語教育における中止形の研究は、動詞の「テ形」の誤用分析に重点を置いたものと、近年特に質・量ともに整ってきた、日本語母語話者と学習者による作文コーパスの調査・分析によるものとに大別される。誤用分析の研究では、まず、「テ形」による「原因・理由」・「継起」の用法について分析を行ったものに、吉田（1994）、吉永（2006）がある。また、漫画を見せてそのストーリーを説明させ、そこでの中止形の使用を考察したものに田代（1995）、渡邊（1996）がある。さらに、「作文対訳DB¹」という学習者作文コーパスを使って中国語母語話者の誤用傾向を調査した研究として塩入（2012）があげられる。これらにおいて、特に誤用の要因についての研究は、継起、原因・理由、条件といった意味の側面、動作主体の異同、文の切れ続きといった観点から進められてきた。

次に、近年の日本語母語話者と学習者による質・量が比較的整えられた作文コーパスの調査・分析を行ったものとしては、橋本（2015）、庵・宮部（2017）、宮崎（2015）がある。橋本（2015）では、「YNUコーパス」の日本語学習者の作文をデータとし、そこに現れた形態素や表現の出現頻度をもとに、学習者に指導すべき項目について検討している。そこでは、接続助詞についても言及されており、「て・で」は、最も出現頻度の高いものとの調査結果がある。しかし、形態素解析(UniDic-1.3.12 Mecab版)により形式を抽出しているため、出現数の中には、補助動詞の「テ形」も含まれているようである。

庵・宮部（2017）は、「JCK作文コーパス²」を調査し、複文の意味的類型ごとの分布を明らかにしている。そこでは、複文の意味的類型として、「並列、継起、条件、原因・理由、逆接・対比、時、目的、その他」という8つの類型を設定している。中止形については、「て」の他に「なく（て）」「ず（に）」という否定形式も取り上げられている点は注目されるが、連用中止節については「省略する」（p.61）とある。また、「継起」と「原因・理由」の意味的類型を担う形式としては、中止形は対象形式として取り上げられてはいない³。

宮崎（2015）は「YNUコーパス」における動詞の二つの中止形について、作文のタスクとの関わりについて調査している。そこでは、読み手が特定されているかどうかや、書き手と読み手の親疎関係が二形式の使い分けの要因として働いており、上級学習者はそれを意識して用いているものの、日本語母語話者の傾向とは有意な差が現れたことが報告されている。ただし議論は主に文体差が中心となっている。

¹ 『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース（ver.2）』（国立国語研究所、2001）

² 「JCK作文コーパス」とは、日本語母語話者、中国人日本語学習者、韓国人日本語学習者がそれぞれ書いた計180本の作文コーパスである。学習者の日本語レベルは、JLPT N1相当以上の力を持つとされており、2000字以上の「説明文」、「意見文」、「歴史文」という三つのジャンルの作文を収めている。詳細は <http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/> を参照のこと。

³ 「継起」としては、「てから、たあと、まえ」の3つ、「原因・理由」としては「から、ので、ために、のだから、からこそ、以上」が取り上げられている。

以上のように、中止形に関しては研究が多いものの、質・量ともに整ったコーパスによる日本語母語話者と学習者との比較調査としては、記述が十分であるとはいえない。本研究は「YNU コーパス」を調査対象とし、日本語母語話者と学習者でどのような使用の特徴が見られるのかについて、主に叙述文における関係の意味を分析の観点とし記述を行う。それにより、上級日本語学習者の文法能力がどのように日本語母語話者に近接しているのか、また、不自然な使用の原因は何かについて明らかにしたい。

3. 関係の意味の種類とその特徴

述語中止形が担う関係の意味について詳細な記述を行っているのが津留崎（2003a）である。津留崎は、従来の中止形の研究は動詞述語に偏っており、形容詞など静的述語の中止形の研究が立ち後れていることを指摘し、形容詞中止形が表す関係の意味を明らかにするとともに、動詞中止形との相違点にも言及し、品詞に関わらず分析できる枠組みを提示している。そこでは、形容詞の中止形の表す関係の意味を、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈》《解説》《評価》《副状態》の8つに分類している。その際に、形容詞が主に主体の特性と状態を表すことがその中止形の性格と関わりが深いとし、「時間的局在性」を分析の観点として取り入れている。具体的には、奥田（1996）、佐藤（1997）、工藤（2001）をもとに、文の表す対象的な内容（＝コトガラ）を、次の表のように時間軸上に局在するデキゴトと時間軸上に局在しない恒常的な特徴に分けている。

デキゴト			特 徴			
運動（動作・変化）	状 態	一時的存在	恒常的存在	特 性	関 係	質

津留崎（2003a：10）

これらのコトガラの内容が先行句節と後続句節として組み合わせられたとき、さまざまな関係の意味が生まれる。例えば、「特性－特性」という組み合わせの場合、「花子は優しくて明るい」のように、特徴を表す《並列》の文となる。また、「状態－運動」という組み合わせの場合、「痛くて声を上げた」のように、デキゴトを表す《原因》の文となる。このような分析を通じ、津留崎は形容詞中止形の表す関係の意味と、時間的局在性との関わりを明らかにしている。本研究では、日本語母語話者と学習者ではこの組み合わせかたに違いが出る可能性があるのではないかと考え、分析の観点とすることにした。

津留崎が示した関係の意味の分類は、形容詞述語を分析した結果によるものだが、時間的局在性において動詞述語は、基本的に「運動」を表し、それ以外の場合も「状態」「存在」「特性」「関係」の範囲に収まるため、動詞述語の関係の意味の枠組みとしてそのまま用いることができる。そこで、

<p>《注釈》 語り手が後続句節の具体的な内容から抽出した判断した特性や状態を、聞き手への注釈として述べる。</p>	<p>特性-状態/運動/繰り返し 「古典に精通していて、よく文学の講師をつとめている。」(特徴) 運動-運動 「彼女は口悪く罵って、二度と来るなど言った。」(デキゴト)</p>	同
<p>《解説》 後続句節の内容に対し、聞き手に向けた解説を述べる。《関係解説》は主体と他との関係を述べ、《原理解説》は、デキゴトの原因や原理を述べる。</p>	<p>関係解説： 関係-名詞述語/特性/運動 「体格は父にあやかって立派だ。」(特徴) 関係-運動/習慣 「兄とは違って、弟はゲームばかりしている。」(デキゴト)</p>	同
	<p>原理解説： 特性-運動 「彼はかなり身長があつて、私を見下ろすような形になった」(デキゴト)</p>	同
<p>《評価》 陳述副詞を含む先行句節が、後続句節の内容に対する語り手の心的態度を表す。前置きの陳述成分となる。先行句節は主観性が《注釈》よりさらに強い。</p>	<p>特性-運動 「小学校高学年にもなると、さすがにしっかりして、よく手伝いをする。」(特徴) 存在-状態 「その小さな店は案外客もいて、こみあっていた。」(デキゴト)</p>	同
<p>《副状態》 主体の主たる状態や動作が後続句節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を、先行句節において述べる(動詞中止形では「付帯状況」とされ、動作の様子を詳しく述べる)。</p>	<p>状態-状態/運動 「花子は震えて、涙を流している。」(デキゴト) 運動-状態/運動 「ベンチに座って、話をする。」(デキゴト)</p>	同

以上、形容詞中止形の場合における津留崎が示した8つの関係的意味について、動詞中止形に置き換えた場合に述語のタイプの組み合わせがどうなるかの一覧を示した。

なお、津留崎(2003a)の用例は、小説をデータにしたものだが、動詞中止形と形容詞中止形の違いについて、既に次の点が指摘されている。

⁴ 仁田(1995:107)の指摘による。

⁵ 仁田(1995:111)の指摘による。

- ・《先行事態》《先行原因》《副状態》の先行・後続句節は、ともに時間軸上のデキゴトが述べられる時間的な関係であり、動詞の中止形の用例に多い。
- ・形容詞は特性を表すため、先行・後続句節の間に、非時間的な関係をもつ例が多く存在する。従来、動詞では指摘されなかった《注釈》《解説》《評価》の例が多く現れる。
- ・動詞と形容詞の中止形は、非典型的な例も含めると、表す関係の意味は品詞の違いに関わらず、かなり重なっている。

以上の点について、今回の作文コーパス調査の結果とも比較したいと考える。

4. 調査概要

4.1 調査対象コーパスについて

本研究の調査対象である「YNUコーパス」は、横浜国立大学（Yokohama National University）の留学生（韓国語母語話者30名、中国語母語話者30名）と、日本人大学生（30名）を対象とし、場面や読み手の異なる12の作文タスクを課したものである。90名×12編タスクの計1080編の作文がテキストファイルで収められており⁶、量・質ともに均整のとれたコーパスであると言える。留学生の日本語レベルは、大学の講義を受けることができ、一般的に上級と称されるレベルである⁷。

4.2 調査方法

調査対象とした形式は、動詞の第1中止形と第2中止形の肯定形である。第2中止形については、「水着を着て（泳ぐ）」といった副動詞（高橋ほか2005）も含む。対象から外したものは、「急いで」「きわめて」などの副詞、「正直言って」などの固定化したモダリティ副詞、「～ては」「～てから」のように第2中止形に助詞がついたもの、「（～に）に関して」「（～に）について」などの後置詞、「遅れてごめん。実は昨日、飲み過ぎて。」のような言いさし文⁸である。

調査方法としては、まず「YNUコーパス」の1080の作文データ（テキストファイル）を1文ずつ縦に並べたExcelファイルを作成し、中止形の現れた文を目視にて抽出した。次に出現位置、述語のモード、ヴォイス、アスペクト形式などの文法的特徴及び関係の意味にもとづきタグ付けを行い、母語・形式別に集計を行った。なお、今回は、コーパス中の中止形の中心を占める叙述のモードの用例についてのみ分析を行う。その理由としては、叙述以外のモード、すなわち「働きかけ」「疑問」「希望」「意志」といった文においては、学習者にみられる不自然な用例について議論すべき部

⁶ 母語別の総形態素数は、日本語母語話者79447、韓国語母語話者81356、中国語母語話者88828である。

⁷ 調査対象の留学生60名のうち、7割の44名が1級（N1を含む）合格者であるとされている。

⁸ 「言いさし文」とは、「ちょっと来てくれる？心細くて。」（白川2009：1）のように従属節のみで終結した文のことである。

分が多く、稿を改めて記述する必要があると考えるからである。

関係の意味の分類について、《注釈》《解説》《評価》の3つは、津留崎 (2003a) において先行句節が「陳述成分⁹」に近づくことが共通の特徴として位置づけられているため、本稿では、集計上は《注釈等》として一つにまとめた。なお、関係の意味は、相互に連続するものであり、《先行事態》か《原因》か、《並列》か《前提》かなど、分類の難しい用例もあるが、筆者の判断でいずれかに分類した。また学習者の用例の中には、語彙の意味から関係の意味は類推できるものの、不自然な用例も現れた。これらについても集計に含めたうえで、その要因について考察を行う。

以下、次節において、概観(4.3.1)、後続節が終止節の場合のムードの現れ方(4.3.2)、叙述のムードにおける関係の意味別の使用状況(4.3.3)、動詞中止形のヴォイスとアスペクトの現れ方(4.3.4)の順に調査結果を述べる。

4.3 調査結果

4.3.1 概観

まず「YNUコーパス」全体において、動詞の第1中止形と第2中止形がどのような割合で出現するかについて概観を示すと、表2のようになる。

表2 母語・形式別動詞中止形の使用回数と使用率

	第1中止形 (～シ)	第2中止形 (～シテ)	中止形合計
日本語	401 (44%)	508 (56%)	909 (100%)
韓国語	225 (27%)	617 (73%)	842 (100%)
中国語	226 (21%)	835 (79%)	1061 (100%)

日本語母語話者については、第1中止形より第2中止形の使用率が高くなっているが、両者に量的な差はあまりないといえる。一方、学習者の場合は、韓国語母語話者、中国語母語話者ともに第1中止形の使用は20%台にとどまるが、第2中止形の使用は70%台を占め圧倒的に多くなっている。カイ二乗検定¹⁰の結果、日本語母語話者と韓国語学習者間には1%水準で有意差が認められ、残差分析の結果、日本語母語話者の第1中止形の使用が有意に多かった ($\chi^2(1)=56.809, p<.01$)。また、日本語母語話者と中国語母語話者でも同様に1%水準で有意差が認められ、残差分析の結果、日本語母語話者の第1中止形の使用が有意に多かった ($\chi^2(1)=116.385, p<.01$)。なお、韓国語母語話者と

⁹ ここでは、津留崎 (2003a) の「陳述」を文の叙述内用に対する語り手の態度とし、文中で陳述を表す成分を「陳述成分」とする」(p.29) という定義にしたがう。

¹⁰ js-STAR version 9.0.4j (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用した。

中国語母語話者間では、1%水準で韓国語母語話者による第1中止形の使用が有意に多かった ($\chi^2(1)=7.334, p<.01$)。この点について要因を明らかにするには、学習者への質問紙調査などによる追跡調査が必要であろう。

文法的に二形式の置き換えが可能な場合に、いずれの形式を用いるかについては、宮崎 (2015) において、日本語母語話者は学習者に比べて第1中止形を用いる傾向が強く、特に読み手が疎遠 (目上) である場合と、レポートや新聞投稿など書き手が改まった態度で書く場合にそれが顕著であることが指摘されている。

4.3.2 後続節のモード

ここでは、先行句節が動詞述語である「叙述のモード」の文が、コーパス全体ではどのぐらいの割合を占めるのかについて確認しておく。なお、今回は後続節が終止節 (主節) の場合に限定している。文のモードは、「叙述」「働きかけ」「疑問」「希望」「意志」「遂行 (感謝・謝罪)」の6種とした。結果は表3のようになった。

表3 後続節のモード別使用回数と使用率

母語・形式 \ モード		モード						合計
		叙述	働きかけ	疑問	希望	意志	遂行	
日本語	第1中止形	244 (97%)	2 (1%)	1 (0%)	0 (0%)	2 (1%)	3 (1%)	252 (100%)
	第2中止形	227 (88%)	16 (6%)	42 (%)	5 (2%)	3 (1%)	4 (2%)	259 (100%)
	中止形合計	471 (92%)	18 (4%)	4 (1%)	5 (1%)	5 (1%)	7 (1%)	510 (100%)
韓国語	第1中止形	135 (94%)	4 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1%)	8 (5%)	149 (100%)
	第2中止形	334 (87%)	21 (5%)	3 (1%)	3 (1%)	15 (4%)	8 (2%)	384 (100%)
	中止形合計	469 (88%)	25 (5%)	3 (1%)	3 (1%)	17 (3%)	16 (3%)	530 (100%)
中国語	第1中止形	126 (94%)	2 (2%)	2 (2%)	0 (0%)	2 (2%)	1 (0%)	133 (100%)
	第2中止形	465 (85%)	33 (6%)	9 (2%)	3 (1%)	8 (1%)	30 (5%)	548 (100%)
	中止形合計	591 (87%)	35 (5%)	11 (2%)	3 (0%)	10 (1%)	31 (5%)	674 (100%)

表によると、後続節のモードは「叙述」が中心であり、日本語母語話者・学習者とも全体のほぼ9割を占めている。残り1割にあたる「叙述」以外のモードの内訳を見てみると、母語話者・学習者間に大きな差はない。その中で特徴を指摘すると、中国語母語話者による「働きかけ」「遂行 (感謝・謝罪)」における用例の多さ、韓国語母語話者による「意志」の用例の多さの二点があげられる。先行研究で指摘されているように、動詞中止形の後続節には未実現の意志や働きかけの表現は使うことができないなどのモード制限がある (蓮沼ほか2001)。その制限に反した次のような不自然な用例が本コーパスにも複数見られた。

(2) 最近は急に寒くなって風邪に気を付けてください。(タスク_05_C038_中国語下位群)

(3) その本が図書館にはなく先生の研究屋(一室)にあることを知り、お借り願います。

(タスク_01_K038_韓国語中位群)

叙述以外のモードについては、学習者による不自然な使用の分析を含め、稿を改めて記述したい。

4.3.3 関係の意味別にみた動詞中止形の使用状況

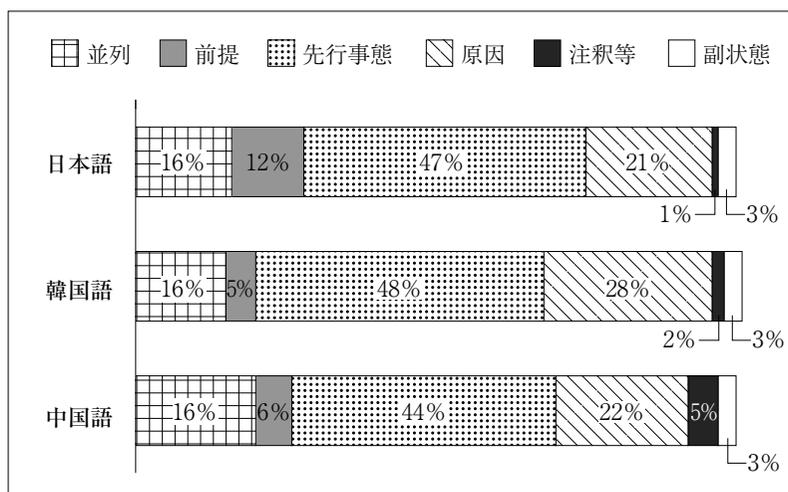
4.3.3.1 関係の意味別の使用回数と使用率

ここでは、叙述のモードにおける関係の意味別の使用回数と使用率を見る。関係の意味の分類は、3節で述べたように、《並列》《前提》《先行事態》《原因》《注釈等¹¹⁾》《副状態》の6分類とした。結果は表4のようになった。なお、図1は、第1中止形における母語別・関係の意味別使用率を表したグラフ、図2は、第2中止形における母語別・関係の意味別使用率を表したグラフである。

表4 関係の意味別動詞中止形の使用回数と使用率

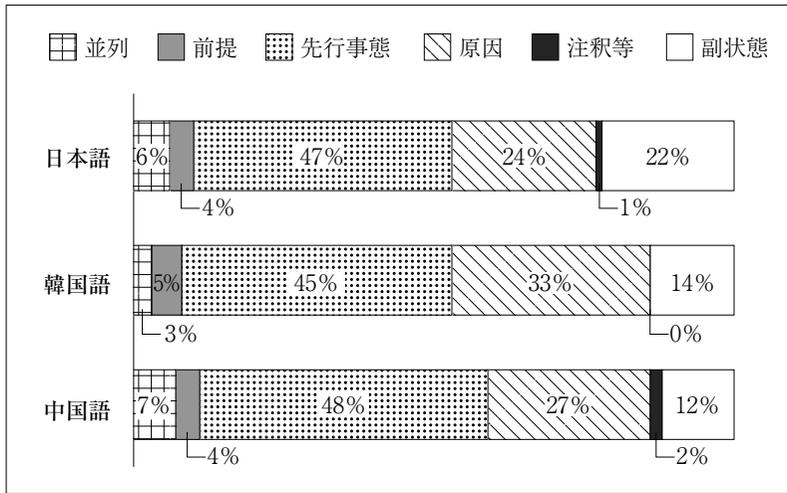
関係の意味 母語・形式		関係の意味						合計
		並列	前提	先行事態	原因	注釈等	副状態	
日本語	第1中止形	40 (16%)	28 (12%)	114 (47%)	50 (21%)	3 (1%)	8 (3%)	243 (100%)
	第2中止形	14 (6%)	9 (4%)	97 (43%)	55 (24%)	3 (1%)	49 (22%)	227 (100%)
韓国語	第1中止形	20 (15%)	6 (5%)	62 (48%)	36 (28%)	2 (2%)	4 (3%)	130 (100%)
	第2中止形	9 (3%)	16 (5%)	148 (45%)	107 (33%)	1 (0%)	46 (14%)	327 (100%)
中国語	第1中止形	26 (20%)	8 (6%)	58 (44%)	29 (22%)	6 (5%)	4 (3%)	131 (100%)
	第2中止形	32 (7%)	20 (4%)	216 (48%)	122 (27%)	8 (2%)	56 (12%)	454 (100%)

図1 関係の意味別・動詞第1中止形の使用率



¹¹⁾ 「注釈」のほか、「解説」「評価」も含む。

図2 関係の意味別・動詞第2中止形の使用率



まず、日本語母語話者について、使用率の高いものを順に挙げると、第1中止形では、《先行事態》、《原因》、《並列》となる。《前提》についても学習者と比較すると高い割合といえる。第2中止形では、《先行事態》《原因》、《副状態》となる。第2中止形に《副状態》が多いのは、「魚を焼いて食べる」のような手段・方法表す例が多いため、これらは第1中止形では置き換えができない用法（「*魚を焼き食べる」）であるため、結果は妥当であると考えられる。

学習者について見てみると、使用率の高いものの順位は、第1中止形、第2中止形ともに母語話者とまったく同じ結果となった。このことは、上級日本語学習者の使用傾向が母語話者と近いものであることを示唆している。また、津留崎（2003a）における、《先行事態》《先行原因》《副状態》が動詞述語に特徴的であるという指摘は、本コーパスにおいても確認されたといえる。

次に、それぞれの関係の意味で二つの形式のどちらがより多く出現しているかについてみる。図3は日本語母語話者、図4は韓国語母語話者、図5は中国語母語話者である。

図3 日本語母語話者

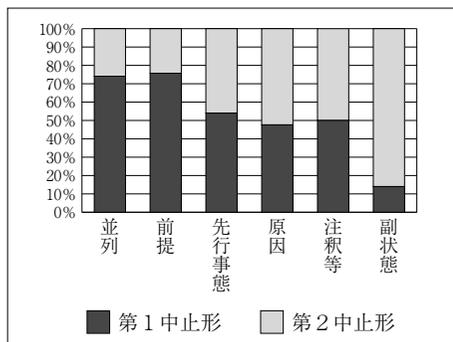


図4 韓国語母語話者

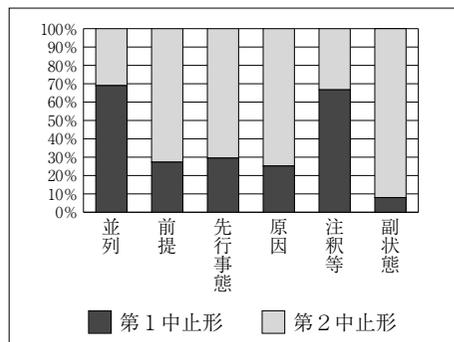
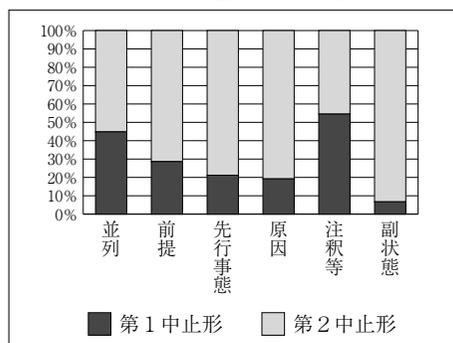


図5 中国語母語話者



日本語母語話者の場合は、《並列》と《前提》において第1中止形が多く用いられ、《先行事態》《原因》においても、やや第1中止形の使用率が高い。一方、《副状態》では第2中止形の使用が中心となる。学習者についてみると、韓国語母語話者の場合は《並列》における第1中止形の使用が高くこの点については母語話者と一致している。中国語母語話者については、《並列》の第1中止形の使用は、他の関係の意味と比較すると第1中止形の使用が多くなっているが、40%程度にとどまっている。韓国語・中国語母語話者いずれも、《副状態》においては第2中止形が多く用いられており、日本語母語話者と同じ結果になっている。なお《注釈等》については、用例数が非常に限られているため、ここでは議論から除く。日本語母語話者が使用していた第1中止形の《前提》の例をあげておく。

- (4) 世界遺産に指定されているお寺がたくさんありどれも一つ一つ特徴があって見ていて飽きません。(タスク_07_J001日本語)
- (5) その娘は、いつもきれいな服を作っており、その服は、着た人を幸せにすると人気でした。(タスク_12_J006日本語)

4.3.3.2 学習者に見られた不自然な用例について

次に、学習者に見られる不自然な使用の要因について考察する。塩入(2012)では、「「て形」は日本語の文接続の際にとりあえず学習者が選択する最も安易な形式であり、誤りも多くなっている。」(p.26)と指摘されているが、本調査においても、第2中止形の使用例に不自然なものが多く見られた。ここでは比較的数量が多かった《先行事態》と《原因》について取り上げ、先行句節と後続句節の述語のタイプの組み合わせに注目してみていく。まず、《先行事態》の用例では次のような不自然な例があった。

- (6) そして、昔の朝鮮時代に王が住みながら国政を行った古宮は地下鉄3号線のギョンボクグ

ン駅でお降りになってごらんできます。(タスク_07_K036韓国語上位群)

(7) 留学生会の皆で投票して、大部分の留学生は奨学金の増えるのが支持します。

(タスク_04_C025中国語下位群)

《先行事態》の場合の組み合わせは通常「状態－運動」「運動－運動」となるが、(6)は「運動－状態」となっている。(7)については、「運動－運動」となっており述語のタイプの組み合わせとしては可能であるが、先行・後続句節の主体が異主体でかつどちらも意志動詞となっているために不自然になっている。

次に、《原因》については以下のような不自然な用例が見られた。

(8) それ以外には留学のため日本へ来て留学生達に対しては一番重要なのは学習です。

(タスク_04_C026中国語下位群)

(9) しかし、「織女」は結婚しなければならない年齢になって、相手がいない。

(タスク_12_C020中国語下位群)

(8)の「運動－判断」、及び(9)「運動－存在」はいずれも、《原因》の組み合わせとしてはないものであるため、不自然に感じられる。また、(8)(9)はいずれも因果関係であることを明示したほうがよいところで、中止形を用いることにより、曖昧になっていることも指摘できる。相手に伝える文章を作成するという目的においては、論理関係を表す接続表現(「～ので」「～ために」「～のに」など)と合わせ、いずれを選択するかという判断が上級学習者には求められる。

以上、関係の意味の枠組みを観点に使用状況を観察した。

4.3.4 動詞中止形のヴォイスとアスペクトについて

形容詞の中止形と異なり、動詞の中止形には、ヴォイスやアスペクトが現れることがある。

(10) お寿しは、世界でも sushi と 言われ、日本の代表的な料理として親しまれています。

(タスク_09_J007日本語)

(11) 若者は牛を 持っていて、せっせと畑をたがやしていました。(タスク_12_J009日本語)

今回は、ヴォイスについては受動形と非受動形の使用比率、アスペクトについては完成相と継続相の使用比率についてのみ調査を行った。まず、受動形・非受動形の別による集計結果は表5のようになった。

表5 動詞中止形のヴォイス（受動形・非受動形）の使用数と使用率

母語・形式		ヴォイス		合計
		受動形	非受動形	
日本語	第1中止形	10 (4%)	233 (96%)	243 (100%)
	第2中止形	11 (5%)	216 (95%)	227 (100%)
	中止形合計	21 (4%)	449 (96%)	470 (100%)
韓国語	第1中止形	2 (2%)	128 (98%)	130 (100%)
	第2中止形	26 (8%)	302 (92%)	328 (100%)
	中止形合計	28 (6%)	430 (94%)	458 (100%)
中国語	第1中止形	4 (3%)	127 (97%)	131 (100%)
	第2中止形	16 (4%)	439 (96%)	455 (100%)
	中止形合計	20 (3%)	566 (97%)	586 (100%)

いずれの母語についても、中止形合計については非受動形が95%前後を占めている。カイ二乗検定の結果でも、日本語母語話者と学習者間に有意差はみられなかった（日韓： $\chi^2(1)=0.933, n.s.$ 、日中： $\chi^2(1)=0.521, n.s.$ ）。ただし、学習者の用例の中には、次のような不自然な例が存在する。

(12) 中身は肉、野菜、海産物などで作り、すごく豪華な味です。

(タスク_09_C010中国語中位群)

(13) この牽牛と織女が渡った橋、鳥と鶴が作ったといって「鳥鶴橋」と呼ばれています。

(タスク_12_K009韓国語上位群)

(14) 新社員歓迎会の時、鈴木先輩がみんなに飲ませてすごく酔っぱらいになった。

(タスク_08_C022中国語下位群)

(15) 当然、父の会社が倒産されて、うちはもう家もなくなった時があるんだ。

(タスク_05_K020韓国語下位群)

(12) (13) (14) は、受動にすべきところでそうになっていない例である。一方 (15) は、「倒産して」と能動にすべきところ、受動になっている例である。この例の場合は、学習者は「倒産する」ことを被害と考え、受動形を使ったと推測できる。よって初級者には見られない上級者ゆえの誤用だと思われる。

次に、アスペクト形式について、完成相・継続相の別による集計結果は表6のようになった。

表6 動詞中止形のアスペクト形式（完成相・継続相）の使用数と使用率

母語・形式		完成相	継続相	合計
日本語	第1中止形	196 (92%)	18 (8%)	214 (100%)
	第2中止形	201 (93%)	15 (7%)	216 (100%)
	中止形合計	397 (92%)	33 (8%)	430 (100%)
韓国語	第1中止形	112 (97%)	4 (3%)	116 (100%)
	第2中止形	295 (98%)	6 (2%)	301 (100%)
	中止形合計	408 (98%)	10 (2%)	458 (100%)
中国語	第1中止形	124 (97%)	4 (3%)	128 (100%)
	第2中止形	412 (96%)	19 (4%)	431 (100%)
	中止形合計	537 (96%)	23 (4%)	560 (100%)

カイ二乗検定の結果、日本語母語話者と学習者の中止形合計の使用数において、韓国語母語話者の場合1%水準で、中国語母語話者の場合5%水準で有意差が認められ、残差分析の結果、いずれも日本語母語話者の継続相の使用数が有意に多かった（日本語・韓国語間： $\chi^2(1) = 11.212, p < .01$ 、日本語・中国語間： $\chi^2(1) = 5.151, p < .05$ ）。学習者の用例の中で、継続相にすべきところに完成相を使い不自然になっているものが見られた。

- (16) この学期○○先生の環境分野の授業を取って最後レポートを書かなければいけないんだ。
 (タスク_02_C008中国語下位群)
- (17) 面白いのは、先輩がその時からずっと寝て今日の朝10時に起きたということがある。
 (タスク_08_K020韓国下位群)

一方で、完成相とすべきところに継続相を使用しているために、不自然に感じられる用例も存在する。

- (18) で歌っている最中に倒れて気を失っていて病院まで搬送された。
 (タスク_08_C040中国語中位群)
- (19) 販売量は2012年までこの2年間を経て、2004年の販売量を戻っていて、100千台くらい販売していた。(タスク_03_C020中国語下位群)

以上の事例は、ヴォイス及びアスペクトのそれぞれの習得と関連させて観察していく必要がある。

5. まとめと今後の課題

本稿では、「YNU コーパス」を対象とし、日本語母語話者と学習者の動詞中止形の使用の特徴について、特に先行研究で明らかになっていなかった関係の意味による使用状況について調査をした。その結果、上級日本語学習者は、日本語母語話者にかなり近い使用分布の特徴を示すことがわかった。

今回の調査で明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

- ①日本語母語話者は、第1中止形の使用率が学習者に比べて高い。学習者の場合は、第2中止形の使用率が第1中止形のそれを大きく上回る。
- ②後続節（終止節）のモードについて、日本語母語話者も学習者も「叙述のモード」が9割を占める。叙述以外のモードでは、学習者のほうが「働きかけ」での使用が多く、母語別にみると、韓国語母語話者は「意志」が多く、中国語母語話者は、「ありがとうございます」や「すみません」といった「遂行（感謝・謝罪）」が多い。
- ③関係の意味別の使用状況は、上級学習者は日本語母語話者と似た傾向を示すことがわかった。ただし、不自然な用例も存在し、その要因としては述語のタイプの組み合わせに問題があることがわかった。
- ④動詞中止形における受動・非受動、また完成相・継続相の現れ方について量的な比較をしたところ、完成相・継続相に関して日本語母語話者と学習者の間に有意な差が見られ、日本語母語話者の継続相の使用が多かった。

今後の課題としては、次のことがあげられる。まず、今回の調査で見られた学習者による不自然な用例についての分析をさらに精査し、母語の影響やレベル差も含めて、その要因と自然な文を作るための指導法を提示することである。また、質問紙調査やインタビューなども行い、学習者が実際にはどのような意識でふたつの中止形を使い分けているのかも調べる必要がある。さらには、今回扱えなかった関係の意味と作文タスク（グラフ説明、昔話、意見文などの「話題」）との関連についても、明らかにしたいと考える。

<調査資料>

「YNU書き言葉コーパス」金澤裕之編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』
ひつじ書房

<参考文献>

- 庵功雄・宮部真由美（2017）「正確で自然な複文の組み立て方」『わかりやすく書ける作文シラバス』
pp.57-73, くろしお出版
- 奥田靖雄（1996）「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2-22, 2-14, むぎ書房（『奥田
靖雄著作集02言語学編（2）』むぎ書房2015所収）
- 工藤真由美（2001）「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法学会第2回大会発
表論文集』（『日本語文法』2-2, pp.46-61, くろしお出版2002所収）
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 呉 揚（2017）『日本語動詞の時間限定性とアスペクト・テンス形式—運動を表さない動詞を中
心に—』岡山大学大学院社会科学研究科博士学位論文
- 佐藤里美（1997）「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞の場合—」『ことばの科学8』
pp.151-212, むぎ書房
- 塩入すみ（2012）「中国人母語話者による日本語従属節選択の誤用傾向—『日本語学習者による日
本語作文とその母語訳との対訳データベース』を用いて—」『海外事情研究』第39巻第2号,
pp21-36
- 白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 高橋太郎ほか（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
- 田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因を
さぐる—」『日本語教育』85号, pp.25-37
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 津留崎由紀子（2003a）「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本
語科学』13, pp.7-32, 国立国語研究所
- 津留崎由紀子（2003b）「日本語教育における中止形の指導と日本語研究」『国文学 解釈と鑑賞』
第68巻7号, pp.144-152, 至文堂
- 津留崎由紀子（2004）「〈前提〉を表す述語名詞および形容詞の中止形」『千葉大学留学生紀要』第
10号, pp.41-61
- 仁田義雄（1995）「シテ形式をめぐって」『複文の研究(上)』pp.87-126, くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版

- 橋本直幸 (2015) 「書き言葉コーパスから見た文法シラバス」『データに基づく文法シラバス』 pp. 67-86, くろしお出版
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ条件表現』 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版
- 宮崎聡子 (2015) 「日本語母語話者及び日本語学習者による動詞中止形の使用状況—「YNU書き言葉コーパス」の調査を通じて—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 第39号, pp.179-194
- 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析—「原因・理由」の用法の誤用を焦点として」『日本語教育』 84号, pp.92-103
- 吉田妙子 (1996) 「言い換え前触れのテ形について」『日本語教育』 91号, pp.49-60
- 吉永尚 (2006) 「テ形接続に見られる誤用についての考察」『園田学園女子大学論文集』 第40号, pp.157-163
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』 くろしお出版